

学級を安定化させる学力づくり・授業づくり

理解度ではなく定着度で差がつく

組織局長 岡本 美穂

落ち着いた学級、安定化された日常は、日々の学力づくりや授業づくりによって支えられていることが多いようです。では、

皆さんが今の学級で一年間続けてこられた実践は何ですか。例えば、国語では、音読・漢字練習・教材の読み取り・作文など、同じことを毎日くり返して行います。そのことが、学級の安定化に寄与している、というのが今回のテーマです。

先日奈良女子大学附属小学校の研究会に参加してきました。そこには奈良女子大学附属小学校の「こだわり」であふれていました。国立でお受験の学校だから、と言っ

てしまえばそこまでですが、目の前で見ただ子どもの姿には驚きました。「個の力」がとにかく鍛えられているのです。それも、1年生から6年生まで徹底して鍛えているのです。

私が参観したのは一年生でしたが、一年

生でもここまで話す力が身につくということ、ここまで伸びるのだということを実証していました。

教師として何を大切に、どういう手順でそこを目指しているのかを見直すきっかけになる会となりました。残り一か月で、この一年間自分は何をこだわってきたのか振り返る機会を持つ必要性も感じました。

■こまめに復習する

人の脳は何度も繰り返し見たものを重要なものと認識し、記憶することができるそうです。だから漢字練習でも

×「やっやっやっやっ書いて練習！」

ではなく、「時間をあけて、コツコツくり返しやる！」というふうにやれば、あつという間に覚えられます。以前脳科学についてテレビで特集がされていた際に、

- ・学んだ内容は、問題を繰り返し解くことで定着する。
- ・脳は入力よりも出力を重要視する。
- ・復習にポイントを置いた学習を行う。

・学習は地道にコツコツと。

・スモールステップ法で成功体験を積む。

というポイントが紹介されました。しつこく解く、こまめに解く、

「チェックテスト」

「小テスト」

という形で、すべて基本的なことを徹底的に反復していくことを教師が主導でやるべきでしょう。

百ます計算、

漢字テスト、

計算ミニテスト・・・今年度六年生を担当し、基礎基本は学年で同じプリントを準備して行うような結果、学年全体でかなりの底上げができました。

1年間続けた 5問漢字テスト

毎日朝の会のコーナーに「漢字五問テスト

ト」の時間を設定しました。ここでは、リーダーが前に出て来て、私が指定した五問の漢字の読みを言います。そして、全員でその五問を漢字で書きます。その後丸付けは教師で行い、その日のうちに返却します。

ポイント

1. 満点以外は点数を気にしない。
2. 教師が漢字を指定する。
3. その日のうちにできるだけ返却する。

1. 満点以外は点数を気にしない。

漢字テストの結果を表にして記録を書かせるといふ実践を聞きますが、これでは格差を生み出すだけです。確かに、できる子、伸びていく子どもは良いでしょう。しかし、漢字は百マス計算と違い、忘れてしまっただけでは答えにたどり着くことができません。つまり、努力しても忘れると解くことができなないので、やる気につながりにくいのです。だからこそ、点数に振り回されることなく毎日続けることに意味があるのです。

2. 教師が漢字を指定する。

一度、漢字係りを作ってその子どもたちが出題する漢字を決めて言いたい、と言ってきました。自主性が大事と思い、試しに係りの子どもが出題する漢字も決めて言ってもらったことがありました。しかし、これは失敗でした。正直、係りの子どもだけ力がついている状態となっていました。つまり、子どもがどこでつまずきやすいのか、ということ子ども同士では見極めることなく、間違いやすそうという視点で子どもが選んでいたのが、教師の視点とは少しずれが出てきているようでした。

3. その日のうちにできるだけ返却する。

五問中、二から三問は前日の漢字テストで間違いが多かったものを出すようにしています。すると、繰り返し目にする、繰り返し書くことにつながるので、より漢字が身につくやすくなりました。

努力と結果が正比例する経験を積み重ね

ていくことが、漢字の習得だけでなく、その奥にある、子どものやる気につながるべくと信じています。

できない子と普通の子の差とは何でしょうか。できない子と普通の子の差は、理解度の差です。できない子は、そもその知識が少なかったり、解法を理解していなかったりします。ただし、できる子と普通の子の差は、定着度です。理解度はあまり変わりません。知識もあまり変わりません。

できる子は、しつこく解いていますし、こまめに解いています。安定して九割以上取れるような子は、ケアレスミス・計算ミスにも厳しいです。しつこく同じ問題を解きます。つまり、理解度ではなく定着度で差がつくということです。その定着度は、学級の友だちと一緒に取り組むなかで得られるものではないでしょうか。「自分の脳は自分で鍛える・みんなで鍛える」久保先生の学級に貼りだれていたのをふと思いだしました。

子どもはみんな、仲間の成長を喜ぶことができます。また、子どもは認めてあげるとやる気を出すことができます。